

「気」の慣用表現に関する研究(VII)

— “気がせく” の意味用法を中心に —

戸 田 利 彦

1. はじめに

『感情表現辞典』(中村明著 東京堂出版 1993)では、日本語の感情表現を、喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚の10類及びそれらの複合感情に分類しているが、この分類法によると、“気がせく”は、‘昂〔あせる・いらいら・緊張・興奮・感動〕’に属することになっている。この類に分類されている他の単純語の「気」の慣用表現は、“気が気でない”“気が揉める”“気が詰まる”“気が置かれる”“気が立つ”の5例である。“気がはやる”“気があせる”は、この辞典には掲載されていないが、“気がせく”との類義性の高さの点で、本来‘昂’に分類されるべき表現と言えよう。しかしながら、“気がせく”“気がはやる”“気があせる”には、意味用法上の微妙な相違がある点には注意が必要である。

例えば、“気がはやる”には次のような用例がある。

そして関の声を耳にし、味方の倒れる姿を目にするや、そばの者たちに、気がは
やって剣をとり忘れたわ、と言いながら、陣屋へかけつけるのだ。そうして供の
者を外へ出し、敵のありかを見張らせておいて、剣を枕の下に隠し、その上で、
いかにもそれを探している素振りをして、長々と時をかせぐ。(テオプラスト
ス/森進一訳『人さまざま』岩波書店 1982)

この“気がはやる”に“気がせく”を入れた場合、合戦で功名手柄をあげる好機を
逃すまいとする意気込みが伝わってこなくなる。

一方、“気があせる”には次のような用例がある。

遅い女学生がかけ声とともに打った球はまるで別の方向へと、凄いい勢いで飛ん
で行った。ちょうど走って来た富田は、頭にそのバレーボールをもちに食らって
ひっくり返った。何とかすぐによろよると立ち上がったが、気が焦るばかりで目
まいがして走れない。こんなことをしてはいられない、とばかり足を動かして歩
き出す。(赤川次郎『三毛猫ホームズの推理』角川書店 1991)

この“気が焦る”に“気がせく”を入れると、“気が焦る”よりも時間的な制約の
存在がニュアンスとして伝わってくる。

一方で、“気があせる”には次のような用例もある。

委員長が先頭をきって逃げだしたとなれば、これは本当に逃げなければならない事態なのだ。そう気がついたときには僕はもうかなり遅れをとってしまっている。背後の学生にも追い越されて、ぼつんととりのこされかけている。あわてて駆けだしてみたが、気があせるばかりで、どこへ逃げたらいいかわからない。大学の奥の方にはあまり来たことがないので、どこに進路があり、どうしたらうまく脱出できるのか見当がつかない。(三田誠広『僕って何』角川書店 1988)

この“気があせる”に“気がせく”を入れると、直後の‘どこへ逃げたらいいかわからない’という‘不確定の行動方針’とニュアンス的に違和感が生じる。

“気があせる”は動詞“焦る”とほとんど同じ意味で用いられ、“気がせく”“気がはやる”よりも広い意味範囲を持つと言えよう。

“気があせる”には次のような用例も見られる。

しばらく走ると、例の袋を目立たないように捨てるのがいかに難しいかを思い知り、何ということに加担したのだろうかともまた暗澹たる気分になるのだった。何しろ十五個も預けられたのだ。重さも相当なものだ。持ち歩くのにも目立つ。しかし、何としても早く処分したい。邦子はどこに捨ててやろうかと考えて、ハンドルを握りながら視線をあちこちに泳がせた。が、気ばかり焦って何度も信号で戸惑っては後ろからクラクションを鳴らされる始末だ。(桐野夏生『OUT〜アウト』講談社 1997)

ここには、格助詞の「が」の省略や句中への「ばかり」の挿入など、“気があせる”の用法上の制約の緩さが見られる。

“気がはやる”も“気がせく”よりも、次のような用例に見られるように用法上の制約は緩い。

「本当に向こうから皆がやってくる…では、ここに居て見物することにしまししょう。」「さあ、始めるがよい。いくら言ってもきかせても聴き入れぬ以上、その逸り気がもとで危難を招いても自業自得というものだ。」「あれがその若者かしら?」「はい、そのとおりでございます。)(シェイクスピア/福田恆存訳『お気に召すまま』新潮社 1981)

ここには“気がはやる”に基づいた“逸り気”という複合語が使用されている。

以上の気付きに基づき、「時間的制約」「自己の願望の実現」「義務の遂行」「具体的な物事の早期実行」などの語によって適確な意味の記述をし、また、用法上の制約の特徴を説明することが可能ではないかという仮説を立ててみることから本研究を始めた。

そこで、本稿では、日常生活において使用されることの比較的多い感情表現である“気がせく”を取り上げ、主要な辞書における意味の記述を確認した上で、実際の用例を整理し、意味用法の分析・記述の結果を報告することを目的とする。

2. 辞書における意味の記述について

ここでは、辞書における“気がせく”の意味の記述を考察しておくことにする。

- (1)『国語大辞典 第一版』(尚学図書編集部編 小学館 1981)

物事を早く実行したくて心が落ち着かない。気がせわしい。気があせる。

- (2)『広辞苑 第五版』(新村出編 岩波書店 1998)

物事を早く行いたくていらいらする。気があせる。

- (3)『日本語大辞典 第二版』(梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修 講談社 1995)

物事を早くしたくて、または、しなければならぬので、心がそわそわする。気持ちがあせる。be impatient あと10分しかないののでー。

- (4)『学研国語大辞典 第二版』(金田一春彦・池田弥三郎 学習研究社 1995)

〈句〉早くしようと心が急ぐ。あせる。「あわてているものだから、一くと余計にその輪がうまく作れなくなった」(島尾・鎮魂記)

四つの辞書における意味の記述は、表現上の多少の違いはあるが、本質的には同じと言ってよからう。(1)(2)が“気があせる”、(3)が“気持ちがあせる”(4)が“あせる”と、要するに、「あせり」という感情を記述している。しかし、個々の記述をみていくと微妙な差異が見られる。(2)のように、「焦燥感」のみを記述しているもの、(1)(3)のように「落ち着かなさ」も記述しているもの、(4)のように“心が急ぐ”を用いて包括的に記述しているものといったように、細かい点においてはすべて異なっている。

また、「あせり」あるいは「落ち着かなさ」の要因について、(1)(2)(4)が「物事の早期実行願望」のみを記述しているのに対して、(3)は「物事遂行への義務感」をも記述している。

以上の四つの辞書における“気がせく”の意味の記述を考察して、まず気付くのは、感情の記述が他の類義語による言い換えになっているものが多いことである。また、感情の要因と感情そのものの記述の区別が必ずしも明確ではない点である。さらに、感情の要因としてさらにもう一つ考えられるのではないかという点である。「時間的制約」「本能・欲求の刺激」を核に感情の要因を、「落ち着かなさ」を中心に感情を記述する必要があるのではなかろうか。

以上の考察を通して、“気がせく”の意味の記述に関して次のような課題を指摘することができよう。

①“気がせく”という感情の要因として具体的にどのようなものがあり、それらはそれぞれどのように記述するとわかりやすいか。

②“気がせく”という感情はどのようなものであり、またそれぞれどのように記述するとわかりやすいか。

3. 意味用法の分析

3.1 用例

- ①看護婦さんはなぜか不自然に口ごもるばかりで、持っていったチョコレートを手渡そうとしても、後ずさりするような気配を見せる。病院の規則で患者の家族からプレゼントをもらうわけにはいかない、という素振りではない。ぎこちない、気まずい表情に顔をくもらせているのだ。産婦人科のナース・センターといえ、よほどのことがないかぎり、看護婦さんたちがこんな表情を、家族に見せるわけがない。突如として私の脳裏に息づまるような不安が突き抜けていった。〈もしや…もしかして?〉形をなさないながら、群れるようにして不安が追いかけてくる。一刻も早く新生児室へ行ってわが子のようなすを知ろうと気が急いた。(小林完吾『愛、見つけた』二見書房 1983)
- ②友だちと二人で、郊外の家をお祝かたがた、たずねることにしました。そこは、私鉄の駅から更に乗りかえて行かなくてはなりません。まだ単線運転で、電車は三十分に一本しかないということである。三十分に一本しかない電車に運よく乗ることができでしょうか。乗換駅が近づくと、私は何となく気がせいてしまいました。(大橋まさこ『すてきなあなたに』暮らしの手帖社 1988)
- ③ギジュマールは深傷を負っていた。耳にした予言におののいてもいた。その傷を治してもらうには、はたしてどの地に向かえばよいのか、心の中で思いめぐらした。いたずらに死を待ちたくはなかった。恋を捧げることができ、しかも苦しみまでも癒してもらえる女性に、かつて出会ったためしがないことは、よく心得ていたし、確言もできた。彼は従者を呼び寄せて言った、「馬に拍車をかけてひと走り、皆と話したいから、戻って来るように伝えて参れ」従者は馬を駆って去り、ギジュマールは残った。大層苦しげにうめいたが、やがて上衣を脱ぐと、それで腿の傷を固くしっかりと縛り、馬にまたがって出発した。その場から遠ざかろうと気がせいた。というのも、誰か家来が戻り、引きとめはせぬかと恐れたのである。(マリー・ド・フランス/月村辰雄訳『十二の恋の物語』岩波書店 1988)
- ④月のさしている向こうのはずれで、一、二、三、わあと、三、四十人の声がかたまつて響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取って、一同が床板を踏み鳴らした。それみろ夢じゃないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこっちも負けんくらいな声を出して、廊下を向こうへ駆けだした。おれの通る路は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが駆け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いのが頭へひびく間に、身体はすんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がってみたが、駆けられない。気はせくが、足だけは言う事を利かない。じれったいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返って、森としている。(夏目漱石『坊ちゃん』集英社 1991)

⑤この駅には自動券売機はない。窓口で話し込んでいる老女を突き飛ばすようにして、東京までの切符を買った。その時、釣り銭の百円玉が落ち、腰掛けの下に転げた。拾おうとした時、黒いバックが目に入った。拾い上げて駅員に声を掛けたが、駅員は何かの計算に懸命で、耳に入らないらしい。「あんだ、もういいだろう。割り込んで切符買ったんだから」老女が睨んだ。列車の時間が迫っていた。ホームまでは陸橋を渡らねばならない。気が急いた。志津子は無人の改札を抜けると、階段を駆け上がった。列車はほとんどぎりぎりに間に合った。車内はがらがらだった。(日下圭介『推理小説代表作選集—待合室で拾った殺人』講談社 1991)

⑥難攻不落の大坂城を、ただの御殿のような建物に一変させる。それだけの土木工事を完璧に終えたうえで、徳川の全軍は引き揚げたのであった。そうと知れば誰だろうと、これが長続きする和睦だとはおもわない。家康の計略だと、読めない者はいないだろう。つまり、いずれまた合戦になるものと、誰もが予想していたということなのである。驚くとすれば、その時期が意外に早かったということだった。それについては、年老いた家康の焦りのためとされている。生きているうちに豊臣を滅亡に追い込みたいと、家康は気が急いたのだ。(笹川佐保『宮本武蔵 三水の巻』文芸春秋社 1996)

⑦遠い電話だから気がせくのか、いつでもほとんど一方的に喋りつけられるのです。まるでそれは人間以外の何かの声のように聞こえてくることがありました。しかし、私には、あなたの私への愛を琴美さまが語れば語るほど、琴美さまのあなたへの愛が感じとられるのでした。(瀬戸内寂聴『渇く』講談社 1996)

⑧自分が降ってきた家を眺めているうちに、そこの汚れて散らかり放題のありさまといたらひと通りでなく、貴族の屋敷どころか浮浪者の巣窟みたいだと気づき、そう思ったら不安になって、さっさとそこを抜けだしてタイヤ置き場へ戻るが勝ちだと独りじめしていた。そう決まったら気がせいて、男爵がはくのはうも見ずにまだ冷蔵庫の中をゴソゴソやっているうちに、目にとまらないようにそっと立ち上がり、手で空中をかきながら、出口の方向と見当をつけたほうに歩きはじめた。(スザンナ・タマーロ／泉 典子訳『うわの空で』草思社 1997)

⑨果歩は中野を所有した覚えなどなかった。いったん所有したものは失う危険があるけれど(果歩はそれを、身をもって学んだ)、所有していないものを失うはずがないではないか。だからこそ一切所有しないで暮らしてきたのだし、ともかく自分がいま中野を失うはずはない、と、できる限りの理屈をかきあつめて果歩は思った。「ね」下北沢の駅につき、あとは坂をのぼるだけのところまでくると、果歩は前を向いたまま中野に呼びかけた。「ね、ビデオ借りて帰らない？」中野は苦笑する。「だめだよ、果歩さん勸弁してよ」じゃあいい、と、果歩はあっさりこたえたが、足どりが重いのは疲れたせいではないのがわかっていて。もうすぐマンションについてしまう、と思うと気が急いた。(江國香織『ホリー・ガーデン』新潮社 1998)

⑩敬太がそろそろと体を起こし、農協の敷地が上がってきた。左手にデイバックを掲げ、そして右手には包丁のようなものを握っていた。おそろおそろという感じで、「光が、見えてさ」と言った。信史は奥歯を噛んだ。それは、滑車を探すために一度だけ点けたあの光だっただろう。自分らしくもない、気が急いでライトを使ったことを、信史は後悔した。敬太が続いていた。「それでここまで来たら、おまえらだってわかったから、一何、してたんだ？ 今、担いでたの、何だよ？ ロープか？ 俺も、俺も仲間にしてくれよ」（高見広春『バトル・ロワイヤル』太田出版 1999）

⑪毎日見慣れた景色なのに、花を見上げているうちに足は地を離れ、ふわりと春の空に誘われる気になる。あそこへ行こう、きっと今日一番の花が見られるに違いない。「とってもいいところ思い出したの。あそこなら飛びきりのお花見が出来るよ」自信を持って子供と主人を連れて先に立った。気が急いで車を拾い赤坂へ行く。（青木 玉『なんでもない話』講談社 2000）

⑫季節感あふれる味、ムカゴを求めて袋と小ざるを持って、草むらや川の土手、石垣や山のほとりを歩き回る。つるの葉のつけ根にできる肉芽は、手を差し伸べて採ろうとすると、なぜかポロッと落ちる。多くなっている時は、気がせくが、つるの下にざるを受けて採る。ムカゴの形状は千差万別で目に楽しい。球形や楕円形、ひょうたん形や雪だるま形。ほていさん形もある。（『中国新聞 [朝刊]』中国新聞社 2003）

⑬七番目のふくろになると、ハシントはもはや、自分がなにをしているのかわからなくなってしまった。疲れを感じれば感じるだけ、気がせいてきて、くるおしいまでの絶望にとりつかれたかのようなだった。でも、つぎのふくろはかつぐことができなかった。運命は八番目のふくろできわまってしまった。かつぎあげようとすると途中でよろめいて、足がいうことをきかなくなり、ほうきれのようにくずおれてしまった。ふくろはころがり落ちて、におい音をたてて背中の上ののっかり、そのまま動くともしなかった。（アンドラス・ラスロ／井上 勇訳『はくのハシントおじさん』昌文社 1977）

⑭少年は浅芽や撫子とも馴染みであるが、「さっき若殿の御前に詰めておいででしたから、お手が空かないかもしれませんよ」という。十四、十五ばかりの伶俐そうな子である。「ほんのちょっとでいいから、とっておくれ。いつもならゆっくり待っているのだけれど、今日は急ぐのよ。日は長いといっても気がせくの、夕方までに帰らないといけないのだから。ほんのちょっと、立話でもいいから、とお願いしてみてください。菊丸」浅芽は熱心に頼み込む。（田辺聖子『不機嫌が恋人』角川書店 1989）

⑮私は舌うちしたい思いだった。五日前といえば、大阪で川辺組に痛めつけられた晩だ。ここにさえすれば、青谷の行方がわかったのに…。「で、その後連絡は？」「ええ、そのときその男になんぞ青谷がほんまに待っているという証拠をもってきてくれな、いっしょに行けん言うて断ったら、今日になってやっぱり閉店ちこうにその男

が店へ来て紙片をわたすんや。こっそりひらいてみたら、たしかにあの人の字で、その男といっしょについて来いということが書いてあったんよ。十一時半に店閉めてやっぱり店を出る前にそこへ電話したけど、返事はないし、その男が待ってるさかい、気がせて…」(生島治郎『追いつめる』光文社 2000)

⑯ももとは発表会のための曲だったのだけれど、発表会が終わってもまだそれを練習したいと申し出て、特別に弾かせてもらっていたほどだ。気が急くのか、そのころは盛り上がりの部分を弾くときに妙に速くなってしまったものだが、今ではちゃんと一定の速度を保って弾ける。「律ちゃんのピアノは、音が明晰だから好よ」とさよちゃんが言い、「律の弾くピアノなら、私はどんな音も好き」と、しま子ちゃんが言った。(江国香織『流しのしたの骨』新潮社 2000)

⑰陽にさらされた白木の床に、たて長の巨大な段ボールが、白い彫刻のように突っ立っていた。はじめは花かな、と思った。しかし持ち上げてみるとずっしり重かった。差出人は「山崎竜一郎」、千葉の旅館の住所が記されていた。旅先だ。何だろうと気がせて、私はその場でばりばりと箱を開けてみた。手紙は入っていないかった。なかからはただずっしりと、ビニールで嚴重にくるまれたビクターの犬が出てきた。(吉本ばなな『アムリタ』新潮社 2002)

3.2 意味

①～⑬の用例に共通しているのは、物事を少しでも早く実行したいと心が落ち着かない状態を示していることである。

①～⑫は原因として“時間的制約がある中で自己の願望を実現しようとする状況”があげられる。その状況を具体的にあげると以下ようになる。

- ①わが子を取り返しにつかない状態になる前に一刻も早く新生児室へ行って様子を知ること
- ②乗り換え駅で三十分に一本しかない電車で遅れないで乗ること
- ③誰か家来が戻って引きとめたりしないうちにその場を遠ざかること
- ④足音や人声の主を取り逃がす前に駆けていって捕まえること
- ⑤陸橋を渡ってホームまで出て列車に遅れないで乗ること
- ⑥自分が生きているうちに豊臣を滅亡に追い込むこと
- ⑦電話料金がかさまないうちに話したいことを話すこと
- ⑧男爵に気付かれないうちに屋敷を抜け出しタイや置き場へ戻ること
- ⑨マンションについて中野が帰ってしまう前に、今夜は一緒にいてほしいことを伝えること
- ⑩一刻も早く滑車を探すこと
- ⑪今日一番の花の見ごろを失わないうちに赤坂へ行くこと

⑫下に落ちてしまわないうちに多くなっているムカゴの肉芽を探ること

⑬～⑯は原因として“時間的制約がある中で義務を遂行しようとする状況”をあげることができる。その状況を具体的にあげると以下になる。

⑬時間内に袋を全部運ばねばならないこと

⑭夕方までに帰らねばならず一刻も早く会わねばならないこと

⑮青谷のところに連れていってくれるという男が待っていてくれる間に電話の通じない青谷のところへ行くかどうか決めなければならないこと

⑯盛り上がりの部分を弾いている間にその部分を盛り上げねばならないこと

⑰は原因として“本能や欲求が刺激される状況”をあげることができる。その状況を具体的にあげると以下になる。

⑰届いたダンボール箱の巨大さやずしりとした重さ、「山崎竜一郎」という差出人、千葉の旅館の住所など、好奇心を刺激されること

以上、“物事を少しでも早く実行したいと心が落ち着かない状態”の原因として特徴的なのは、人間関係にかかわるものが必ずしも多くない点である。確かに、③の「家来」、④の「足音や人声の主」、⑥の「豊臣」、⑦の「わたし」、⑧の「男爵」、⑨の「中野」、⑭の「少年」、⑮の「男」などは、その人間関係が“気がせく”という感情の原因としてかかわってはいるが、それ以上に「時間的制約」の方が重要な要素である。“気がせく”の意味として、“時間的制約がある中で自己の願望を実現しようとする状況、時間的制約がある中で義務を果たそうとする状況、本能や欲求が刺激される状況が原因となって、物事を少しでも早く実行したいと心が落ち着かない状態を示す”点があげられよう。

3.3 用法

3.3.1 文型

文型に関しては、いわゆる感情形容詞と同様であり、「ダレダレは／も——。」となる。“ダレダレ”は基本的に1人称となる。過去形の場合(③⑤⑥など)は3人称も可能である。直前に“…+と(①③⑥⑰)”すなわち心中文と格助詞の「と」が使用される場合が多い。接続助詞を伴う条件節の形式で理由を説明する文型も比較的多い。“…さかい(⑮)”“…から(⑦)”“…と(⑨)”“…たら(⑧)”がある。この他、直前に“…すれば…するだけ(⑬)”という比較の表現が使用される場合もある。また、“なんとなく(②)”といった漠然とした様子を示す表現と共に使用されることもある。“—が…(④)”のように直後に逆接の接続助詞を伴う形式で実際の行動の困難さを説明される場合もある。

3.3.2 文法

文法に関しては以下のような表現は可能である。

連用修飾を受けうる	なんとなく気がせく／非常に気がせく
連体修飾句に立ちうる	気がせく思い
受身表現をとりうる	気がせかされる

しかしながら、以上の用例は例外的なものあり、自由度が高いとは言にくい。また、以下のように制約が多い点には注意が必要である。

連体修飾を受けえない	*私の気がせく
句中に連用修飾語を挿入しえない	*気が非常にせく
否定の表現をとりえない	*気がせかない
名詞句に転換しえない	*気せき

4. 「気がせく」の意味用法

以上の考察結果に基づき、ここでは“気がせく”の意味用法をまとめておくことにする。

〈意味〉

意味は、物事を少しでも早く実行したいと心が落ち着かない状態を示す。その原因としては、“時間的制約の中で自己の願望を実現しようとする状況”“時間的制約の中で義務を遂行しようとする状況”“本能や欲求を刺激される状況”をあげることができる。

〈文型〉

「ダレダレは／も + (A) + (B) + —— + (C)。」

Aには“…+と”のように心中文と格助詞の「と」が使用される場合が多い。また、“…ので”“…から”“…と”“…たら”などのように接続助詞を伴う条件節の形式で理由を説明する表現が使用されることも比較的多い。Bには漠然とした様子を示す表現が使用されることがある。Cには“—が…”のように逆接の接続助詞を伴う形式で実際の行動の困難さを説明する表現が使用されることもある。

〈文法〉

連用修飾は、“なんとなく気がせく”“非常に気がせく”のように受けることが可能である。連体修飾句に立つことは、“気がせく思い”のように可能である。ほとんど文の述部として使用される。過去形は可能であるが、連体修飾、句中への連用修飾語の挿入、否定の表現、名詞句への転換などはできず、文法面で比較的制約が多い。

5. おわりに

本稿では動詞性の「気」の慣用表現として“気がせく”を取り上げたが、現代(1977～2003)の実際の用例を通して、意味は一つであるが、その原因は三つに分類しうることが明らかになった。今後は、“気がとがめる”と類義性の高い“気が差す”という逡巡の表現、“気が悪い”という形容詞・形容動詞性の感情表現、“気にする”“気になる”“気にかかる”“気にかける”“気が痛む”“気に病む”“気で気を病む”“気が落ちる”“気が落ち込む”“気が挫ける”“気が沈む”“気が滅入る”“気が鬱する”“気がふさぐ”“気が腐る”“気が詰まる”“気も漫ろだ”などの表現の考察を課題としたい。

【参考文献】

- 木村 敏 (1972) 『人と人との間—精神病理学的日本論—』 弘文堂
星野 命 (1976) 『身体語彙による表現』 『日本語講座 4 日本語の語彙と表現』 大修館書店
宮地 裕 (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院
中村 明 (1993) 『感情表現辞典』 東京堂出版
戸田利彦 (1994-1998) 『日本語慣用表現に関する研究 (I)～(V)』 『教育学研究紀要』 第40-44
第2部 中国四国教育学会